



Speech-Language-Hearing Therapists

# 10 言語聴覚士

言葉によるコミュニケーションに支障がある人を対象に、リハビリで改善を図る国家資格の専門職です。脳、耳、口、のどの問題により、上手く話せない「言語障がい」、音が聞き取れない「聴覚障がい」、声が出ない・口が上手く動かない「発声・構音障がい」、上手く食べられない「摂食嚥下障がい」のある人のサポートが主となります。

## Q 言語聴覚士になるには？

**A** 国家資格の取得が必要です。高校卒業後、大学や専門学校などの言語聴覚士養成施設で3年以上学ぶことで、国家試験の受験資格を得ることができます。

試験は毎年2月下旬に行われ、近年の合格率は70%前後です。北海道内の資格取得者数は、2020年は84人、21年は88人と推移しています。

## Q 活躍の場所は？

**A** 主な就職先は病院です（**下図参照**）。脳卒中や神経難病を対象とする脳神経外科・脳神経内科、リハビリテーション科のある病院への就職が多いです。最近は、がんや循環器、消化器、呼吸器など多様な疾患を対象にすることが増えており、活躍する病院の幅は広がっています。施設においては、高齢者施設はもちろん、主に発達障がい児を対象とした分野での活躍も増加傾向にあり、教育機関などで障がい児教育に関わる言語聴覚士もいます。また少数ですが、独立開業する人もいます。乳幼児から高齢者と幅広い年齢層を対象に病院から在宅まで、さまざまな場所で活躍しています。

## message /

言語聴覚士は、コミュニケーションと食べることに障がいを抱えた人を支援するリハビリテーション職種です。病気によってコミュニケーションやご飯を食べることが難しくなった人は、自分の気持ちや考えを相手に伝えられず、好きなものを食べることができない生活になります。対象となる人が、豊かに、その人らしく生活できるように、医学的知識はもちろん、心理学的知識など様々な知識・技術を駆使して、言語聴覚士は対象者のコミュニケーションと食べることを支援します。

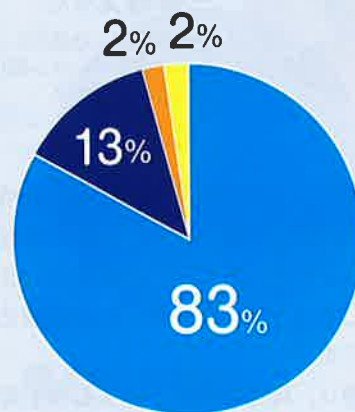
AI技術が進歩しても、コミュニケーションは人と人が行うものであり、言語聴覚士の存在は重要です。学生の皆様には、ぜひ、言語聴覚士の資格を取得し、より多くの人の生活を支援していただくことを願っています。



© hisa-nishiya - stock.adobe.com

(一般社団法人北海道言語聴覚士会)

## 北海道言語聴覚士会 会員所属先



- 病院
- 養成校
- 訪問系事業所
- 福祉施設

協力／一般社団法人 北海道言語聴覚士会



## コミュニケーションの楽しさを再認識！

上山智美さん

北海道医療大学病院 言語聴覚治療室  
北海道医療大学卒

「コミュニケーションが大切で、子どもも対象となる言語聴覚士の仕事に惹かれ、この仕事を志望しました」

上山さんは現在、卒業した大学の系列病院で、発達障害のある子供の発語の検査や訓練を中心に、耳の間こえが悪い人の聴力検査、補聴器の調整、認知機能の評価などを行っています。仕事をしているなかで大きいのは、患者さんと達成感やよろこびを分かち合えるところだと言います。「ついこの前できなかった動作がリハビリによってできるようになると、患者さんのモチベーションが上がって、私自身もやりがいを感じます」

また、あらためてコミュニケーションの楽しさを感じているとも言います。「人生の大先輩である高齢患者さ

んからは学ぶことも多いですし、発語が難しい患者さんと少しずつ理解合ってコミュニケーションの方法を探ることも、さまざまな発見があります」

これから勉強したいことは、子どもやその家族との関わり方だとか。「幅広い分野で働くことができる言語聴覚士は、可能性にあふれた職種だと思います」と最後にメッセージをくれました。



## 職業人として成長できる仕事

濱 雄祐さん

社会医療法人慈恵会 介護老人保健施設・介護医療院  
北湯沢温泉いやしの郷 リハビリテーション課 言語聴覚主任  
日本福祉リハビリテーション学院卒（現・日本医療大学）

「高齢の利用者さんが自宅に帰れるようにリハビリを提供する介護老人保健施設で、唯一の言語聴覚士として活躍する濱さん。サッカーに明け暮れた高校時代、ケガをきっかけに知ったのが3つのリハビリに関わる職種でした。最初に憧れを抱いたのは選手をサポートする理学療法士。でも、短い競技人生の中では関わる期間が限られているため、食べることや人と話すといった、当たり前ながら生涯続く大切な行為を支える言語聴覚士の道を選びました。」

「一度失った機能の回復をサポートできる言語聴覚士は、自分にとって職業人として努力し、成長し続けることができる職業だと感じました」

どうすれば利用者さんと意思疎通が図れるのか、食事

形態や姿勢を工夫することで、ムセずに食事を美味しく安全に摂取できないか――。

利用者さんのより良い生活をめざし、チームで取り組む毎日だと言います。

やりがいは、関わるすべての人の笑顔と感謝の言葉。「人生最期の食事で満足そうに好物を口にしている利用者さんと、見守るご家族と共有できる時間もかけがえのない瞬間です。『リハビリをしてもらえて良かった』と、1人でも多くの方に感じてもらえるようなスペシャリストをめざしていきたいです」

